1ｇのどうでもイイ話

紀本　真利亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１gのどうでもイイ話

【Ｎコード】
Ｎ１４３４Ｅ

【作者名】
紀本　真利亜

【あらすじ】
ちょっとお馬鹿なジョンとブルは幼馴染。いつも一緒にいる彼らだが毎日を無駄に過ごしている。ある日、ジョンが携帯電話を拾う。興味津々の二人は携帯を見ようとした。すると携帯が鳴り出しメールが届いていていた。そして、メールを見た彼らは・・・。

ジョンとブル　拾った携帯電話　第一話（前書き）

ちょっとお馬鹿風に面白可笑しく書いてみました。長期ではないのでなるべく早く完結させたいです。2～3話で完結予定です。

ジョンとブル　拾った携帯電話　第一話

本来、北海道の４月はまだ肌寒い季節。しかし、温暖化の影響なのか分からないが今年の４月は本当に暖かい。

「イヤー、暖ったかいなぁ」
タバコを吹かしながら隣の相棒に言う長身の男。
「なぁ！暖っかいより熱くねぇ？！」
もう味のしないガムを噛み続ける太った男は長身の男に言う。

「やばいっしょ。これが噂の地球温暖化ってヤツか？！なぁ、ブル」
長身の男は太った男の顔にタバコの煙を吹きながら言った。
「煙いべぇ？！ジョン！！止めろや！」

長身の男がジョン。太った男がブル。二人とも生粋の日本人だがこれが二人の間の呼び名だ。ジョンの右腕には蛇のタトゥー、ブルの左腕にも蛇のタトゥーが入っている。二人は幼馴染で親友なのだ。

ブルはジョンの顔にガムを飛ばしながら
「ちげぇよ！エルニーニョのせいだよ！」
「マジでぇ？！エルニーニョ？？！初耳だぜそれ？」

二人は根本的に一般知識が足りないのだ。

「おう、エルニーニョ！意味は良く分からないけどな！」
ブルは何やら勝ち誇った顔で言う。
「まぁ、兎に角、熱いって事だ」
またタバコに火を灯すジョン。

熱い熱いとは言っても周りの人はまだ春着を着ている。彼らだけがタンクトップを着ているのだ。しかも見た目もかなり厳ついので周りから見たらかなり近寄りがたい存在なのである。

「なぁ？何か面白い事ねぇか？」
「喧嘩でもすっか？」
「おお、良いネェ。ブルはたまに良い事言うね！」

周りを物色しだす二人。だが、朝の九時の街中。なかなか相応しい若い人はいない。

「意外といないねぇ」
「うーん、とりあえず大通りで寝るべ！」
「相変わらず良い事言うね！ブルは！」

二人は大通りの向かう事にしたのだ。タバコを吸う長身のジョン。また新たにガムを噛むブル。二人は本当にどうしようもないのだ。

大通りに着きまだ所々茶色い芝生を歩き、横になる場所を探しているとジョンが何かを発見した。

「あれぇ？？なんだあれぇぇ？？」
何やら駆け出すジョン。走り方は微妙に蟹股だ。
「おい、何だよ？！」
慌てて追いかけるブル。
ジョンは右手で小さな黒い物を拾い上げた。可愛いストラップの付いた黒い携帯電話だった。

「携帯だぜぇ？どうする？」
タバコをフィルター近くまで吸ったジョンは近くの灰皿のあるベン

チまで歩き出した。
「よし！エロ電話掛けようぜ！」
クチャクチャ口から音を出しながらブルは提案を出した。
「良いネェ！流石はブルだ！！」
ジョンは右手の親指を使い折りたたみの携帯を開いた。
「なんじゃぁこれは！？」

携帯の待受けは画面は幸せそうな若いカップルだったのだ。女っ気の無い二人は意味も無く唐突に怒り出した。

「こいつ等ヤベェよ！女は可愛いし！！」
本気で怒るジョンにブルは続けた。
「良し。海外サイトへ飛ぼう。こいつに天誅を喰らわせてやろう！」
「良いネェ！流石はブルだわ！」

ジョンがインターネットに接続をしようとすると拾った黒い携帯が鳴り始めた。

「うおっ！ビックリした！」
綺麗な着音に驚くジョンにブルは大笑いをする。
「ビビリだねぇ。ハハハァッ！」
「ウルせい！」
ちょっと恥ずかしかったのかテンションの下がり気味のジョンはメールが着ている事に気づいたのだ。
「おっ、メールかよ？！」
「見ようぜ！見ようぜ！」
何故か鼻の下を伸ばすブル。二人はメールの内容に興味深々になっていたのだ。
受信メールをクリックするジョン。
「どれどれ？」

『 昨日はゴメン。後悔したくないから今から会いに行くよ。だから少し時間をくれ。必ず行くから少しだけ待っててくれよ 』

恐らく待受けのカップルの男からのメールだった。

「なんだ？喧嘩してんのか？こいつ等」

小さな画面に頭を寄せて見入るブル。

「ざまぁねぇな。ハハッ。どれ、オレがこの痴話喧嘩の原因を突き止めてやる」

ジョンはそう言いながらベンチに腰を掛けタバコに火を付けた。ブルも隣に座りまた新たにガムを一つ口に入れた。

「どれどれ、3日位前から遡ってやるか」

鼻から大量の煙を出しながら真剣な赴きで携帯を見入るジョン。

体の大柄なブルは携帯を一緒に見ようとするがプライバシーアングルが作動している為に見えないが見ている振りをする。

「ふむふむ」

「あっ？どうなんだよ？！」

とても暇な二人はこの携帯電話の持ち主の喧嘩の理由に興味を奪われていた。健全な人ならば警察に届けるのだが、この二人はやはり一般知識に欠けているのだ。

「おめぇはクチャクチャウルサイな！少し黙ってれ」

「だってよ、気になるべ？」

「とりあえず3日前までは幸せだったみたいだ」

顎を上げ眉間に皺を寄せ渋い顔をしているジョンをブルは急かす。
「じゃ、2日前か?!」
すると、ジョンは右目だけ大きくし鼻の両穴から煙を噴出した。そして、ブルの顔を見ながらテレビに出てくる警部並みの低い渋い声で、

「事件が起きたのは昨日だ・・・」
「まじ?!昨日??それって最近じゃん!!」
最近も何も無い、昨日は昨日なのだ。

「で?原因は何よ?!カハッ!」
慌てたのか口からガムが吹き出たブルを他所にジョンは概要を説明しだした。

「要するに、こいつ等は別れの危機に直面してる訳だ。」
「別れんのか?良い事じゃネェか、なぁ?!」
「まぁ、聞け。ちょっと切ない話よ」
感動系のアニメや映画が好きなジョンはこの赤い糸が切れそうなカップルに既に心を奪われていた。
「何、良くある話さ。女が仕事で札幌を離れなければならない。結構前から女は知っていたんだが男に言えずギリギリまで黙っていたんだ」
「それでその事を知った男が別れたくないから怒ったのか?」
ブルはガムをまた噛み始めた。
「そうだな」
「なんだよ?!それ!!その男、小せぇな!!」
正義物のアニメや特撮物が好きなブルは相手の都合も考えずワガママなこの携帯の持ち主の女の男に怒りを感じ始めていた。
「やりに行こうぜ!その男!!」
怒りに浸透しているブルにジョンは珍しく冷静に言い放った。

「それじゃ、ダメだ。この女が報われない」
「おい！どうしたんだ？いつものジョンで行こうぜ！？」

「はぁー」
一つ小さな溜め息を付いたジョンは静かに語り出した。
「なぁ？いつも俺達は人に迷惑をかけて生きてきた。だからたまには人の為に何かをしてあげようぜ」
何処かを遠い目で見ながらブルに問い掛けたのだ。

すでにジョンはこの時、『感動映画に出てきそうな良い人（決して主役ではない）』気分に陥っていたのかも知れない。
またブルもジョンの言葉に感銘を受けてか心の中に『正義という名の十字架』を背負おうとしていた。二人とも柄は悪いが兎に角、気持ちはとても真っ直ぐなのだ。悪く言えば心は子供のままで大人に成りきれず影響され易い、良く言えば大人になろうとしているのだ。

「そうだな！こいつ等の為に人肌脱いでやるか！」
ブルも賛成し出した。
「いいね！！流石はブルだわ！！」
一際大きな声を出し周りから白い目で見られるが彼らにはお構いなしだ。

「で？どうすれば良い？」
ブルはジョンに今後について聞いてみた。
「うーん。この二人が会えれば良いんだろ？どうすれば良いのかな？」
ジョンはどうしたら良いのか分からなかった。
「とりあえず、女を捜してドコにも行かさなければ良いんじゃネェ

のか？」
ブルは少しまともな事を言った。
「そうだ！この女に電話すれば良いんじゃねぇか？」
「お前！頭良いな？！！」

携帯の持ち主の番号に電話を掛けても繋がる筈も無い。何故ならその携帯がこの二人が持っているからだ。だが、その事に二人は気づかない。が、その前にこの携帯の番号すら発見できなかったのだ。

「どうすれば携帯の番号を出せるんだっけ？」
ジョンは携帯と格闘している。
「さぁ、知らねぇ」
ガムを噛みながら困った顔をするブルは続ける。
「とりあえずこの女を捜しに行こうぜ？なにか情報はないのか？」
「そうだな、メールを見る限りは・・・」
メールを見直すジョンは一時を置きまた喋りだした。

「出発は今日の十一時みたいだな」
「十一時？朝の？夜の？」
ブルは確認の為聞いた。
「わかんねぇ」
「それは困るぜ？！相棒？はっきりしろ！」
ブルは焦りを隠しきれない。きっと正義の心に１００％支配されてしまっていたのだろう。
「多分、朝じゃネェ？ＡＭって書いてるけど解らん」
ジョンは少し困った顔でブルを見た。

「兎に角、善は急げだ！」
「相変わらず良い事言うね！ブルは！！」

二人は行き宛も未だに解らないのにとりあえず大通りから離れたのだっだ。

ジョンとブル　拾った携帯電話　第一話（後書き）

ここまで読んでくれた方には感謝します。2話も読んでくださいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1434e/

1ｇのどうでもイイ話

2010年10月11日21時59分発行